

国際日本学研究所

【2025 年度 大学評価総評】

国際日本学研究所における 2025 年度の自己点検・評価ならびに中期目標・年度目標達成状況報告書に基づく諸活動は、総じて高い水準にあると評価できる。研究会や国際シンポジウムの企画運営、ワークショップの実施等、アカデミックな発信力は着実に深化しており、なかでも「トランスナショナリズム」を共通テーマに据えた研究実践は、既存の学術的専門性を超えて学際的知の結節点を形成しつつある。加えて、情報科学との越境的連携にみられるように、文理融合の探究は、現代的課題への新たな応答として学内外から高く評価される取り組みである。

また、社会連携・社会貢献に関しても、講演会や表彰、広報活動等を通じて、研究成果の社会的実装と可視化が図られている。とりわけ、国内外の多様な研究者・有識者との協働によって醸成された研究基盤は、同研究所の国際的プレゼンスを裏打ちするものとして特筆に値する。

一方で、「社会貢献・社会連携」に関する記述については、引き続き報告様式上の明確性や具体性の向上が求められる。今後は、教育・研究・社会の三位一体的展開における「実践知の体系化」として、さらなる戦略的設計と継続的評価が望まれる。総じて、本研究所は卓越した学際知の創出と、その社会的波及に向けた真摯な取り組みを着実に推進しており、その存在意義と発展可能性は極めて高いと判断される。

【2025 年度 自己点検・評価結果】

I. 改善・向上の取り組み

(1) 2024 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2024 年度大学評価結果総評】(参考)

研究所主催の研究活動として研究会 5 回、国際シンポジウム 2 回、ワークショップ 1 回を行うなど、活動的な研究活動を実施しているものと評価される。

2023 年度は、前年度の大学評価結果総評における指摘を受けて、研究員の専門分野に限定されないテーマ「トランスナショナリズム」を掲げ実践したこと、社会学・哲学・人類学・歴史学・政治学等、国内外の研究者が協働する調査研究を行ったこと、「学際分野の拡充への期待」に対して情報科学と文系分野のコラボ企画として研究会を行ったこと、など指摘事項への対応状況も十分に評価される内容となっている。併せて、学外有識者による外部評価を受け「国外との研究連携事業」「国内研究会活動」「データベース事業」「刊行物等」「その他」の五項目すべてにおいて高い評価を得たことも特筆すべきである。特に前半部分は研究所としての存在意義を強く支える視点でもあるので、継続的な努力とさらなる向上を目指していただきたい。

なお、2023 年度中期目標・年度目標達成状況報告書の「社会貢献・社会連携」の年度目標に対する自己評価の理由について、より対応した内容・表現が望まれる。

【2024 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

研究活動に対する高評価をへげみに、今後も種々の研究活動を継続発展させる。これまで書類上、本研究所の「社会貢献・社会連携」については具体的な記述が少なかったことを鑑み、2024 年度中期目標・年度目標達成状況報告書では同年 4 月 14 日に開催したカステル＝ブランコ氏の講演、ヨーゼフ・クライナー賞、アルザスワークショップ等、種々のイベントと広報についての内容を記した。

(1) 改善・向上の取り組み(教員・教員組織)

<p>研究所(センター)内で教員の研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るために、組織的な取り組みを行い、成果を得ていますか。</p> <p>＜対応する大学基準：教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげていること。＞</p>	<p>S. さらに改善した又は新たに取組んだ</p> <p>A. 概ね従来通りである又は特に問題ない</p> <p>B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。</p>	<p>A(概ね従来通りである又は特に問題ない)</p>
<p>上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。</p>		

Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。  
 ≪内容≫

(2) 改善・向上の取り組み (社会連携・社会貢献)

社会連携・社会貢献に関する取り組みにより、地域や社会の課題解決等に貢献し、大学の存在価値を高めることにつながっていますか。 <small>≪対応する大学基準：社会連携・社会貢献活動の状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。≫</small>	S. さらに改善した又は新たに取り組んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	A (概ね従来通りである又は特に問題ない)
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
≪内容≫		

II. 全学的な自己点検・評価結果より見出された重点的な評価項目

(1) 自由を生き抜く実践知を体現する取り組み

研究所(センター)における「実践知」を体現する取り組みについて、改善・向上を図っていますか。 <small>≪対応する大学基準：社会連携・社会貢献活動の状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。≫</small>	S. さらに改善した又は新たに取り組んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	A (概ね従来通りである又は特に問題ない)
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
≪内容≫		

III. 2024 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準	研究活動	
中期目標	「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、対象分野を拡大充実させ、特に「現代日本」の研究を本格化させていくことを目指す。国際日本学研究所と深く関わる、国内外の他の機関との連携をさらに強化する。	
年度目標	従来の「国際日本学」研究をさらに推進するとともに、「現代日本」に関する調査研究を行う。	
達成指標	研究対象および連携研究者の増加	
年度末報告	執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	重点目標であった「トランスナショナリズム」をテーマに、研究会を2回、フランスにおける国際ワークショップを1回開催した。その他、学外のポルトガル人研究者による講演会、三木清関連の研究会など、研究対象の幅を増やすとともに、連携研究者も増やすことができた。
	改善策	—
評価基準	社会連携・社会貢献	
中期目標	研究所からの情報はHPを通じ、広く、迅速に発信する。また本務に影響の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史資料原本の閲覧希望に応じるようにする。	
年度目標	本研究自設HPの英語ページの改修をすすめるとともに、海外向けの情報発信力を強化する。	
達成指標	研究会への一般市民の参加者の増加。公開された刊行物の増加。現状のウェブサイトの再検討と改善	
年	教授会執行部による点検・評価	

度 末 報 告	自己評価	A
	理由	4月14日開催のカステル＝ブランコ氏の講演「一六世紀の驚き」は、91名の参加者があった。「ヨーゼフ・クライナー博士記念法政大学国際日本学賞」の応募者も今年激増した。アルザスワークショップの応募者、特に日本からの応募者もかなり増えた（日欧計33名）。SNSやメーリングリスト等を用いた積極的な広報活動の成果と思われる。
	改善策	—
<p><b>【重点目標】</b> 昨年度からの研究テーマ「トランスナショナリズム」をさらに追求する。現代日本に特有な現象として「トランスナショナリズム」を考えるのではなく、歴史的な観点を加えて考究する。</p> <p><b>【目標を達成するための施策等】</b> 専任所員を中心に「トランスナショナリズム」をテーマとした研究企画（シンポジウム、研究会）を行い、成果をまとめる。</p> <p><b>【年度目標達成状況総括】</b> 「トランスナショナリズムな日本」と題した研究会を合計2回、国際ワークショップを1回開催することができた。また、タイトルに「トランスナショナリズム」をうたってはいたなくとも広義の「トランスナショナリズム」に関連する研究企画を行うことができた。よって、年度目標は十分達成できたといえる。</p>		

#### IV. 2025年度中期目標・年度目標

評価基準	研究活動
中期目標	「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、対象分野を拡大充実させ、特に「現代日本」の研究を本格化させていくことを目指す。国際日本学研究と深く関わる、国内外の他の機関との連携をさらに強化する。
年度目標	従来の「国際日本学」研究をさらに推進するとともに、「現代日本」に関する調査研究を行う。
達成指標	研究対象および連携研究者の増加
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	研究所からの情報はHPを通じ、広く、迅速に発信する。また本務に影響の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史資料原本の閲覧希望に応じるようにする。
年度目標	卒業生、留学生の交流連携事業を企画し、実行する。
達成指標	本学卒業生の研究発表会に留学生を招き、議論する機会を設ける。
<p><b>【重点目標】</b> 従来の研究テーマ「トランスナショナリズム」をさらに追求する。現代日本に特有な現象として「トランスナショナリズム」を考えるのではなく、歴史的な観点を加えて考究する。</p> <p><b>【目標を達成するための施策等】</b> 専任所員を中心に「トランスナショナリズム」をテーマとした研究企画（シンポジウム、研究会）を行い、成果をまとめる。</p>	

IV-2. 2025年度中期目標・年度目標達成状況報告書

国際日本学研究所

評価基準	中期目標 (2022-2025年度)	年度目標	達成指標	年度末報告		
				教授会執行部による点検・評価（教授会承認）		
				自己評価	理由	改善策
研究活動	「国際日本学」という研究分野の存在が広く認知されてきたことを受けて、対象分野を拡大充実させ、特に「現代日本」の研究を本格化させていくことを目指す。国際日本学研究と深く関わる、国内外の他の機関との連携をさらに強化する。	従来の「国際日本学」研究をさらに推進するとともに、「現代日本」に関する調査研究を行う。	研究対象および連携研究者の増加	S	本研究所の研究企画はこれまでヨーロッパの研究者との連携を中心に行ってきたが、2022年度以降はそれ以外の地域（アメリカ、アジア諸国）の研究者との関係を深めることができた。結果として、研究対象の幅も広げることができた。	国際情勢の変化に伴い、これまでアルザス欧州日本学研究所との協力でやってきた「日欧新世代ワークショップ」をフランスで開催することができなくなった。今年度は急遽日本での開催に切り替えて実施したところ、新たな研究の可能性も感じられた。今後も国際情勢を見ながら、継続的にワークショップを行う方法を確立する。
社会貢献・社会連携	研究所からの情報はHPを通じ、広く、迅速に発信する。また本務に影響の出ない範囲で、マスコミや研究者からの所蔵史資料原本の閲覧希望に応じようようにする。	卒業生、留学生の交流連携事業を企画し、実行する。	本学卒業生の研究発表会に留学生を招き、議論する機会を設ける。	S	本学卒業生（元留学生を含む）の研究発表会を3回開催し、教員や学生と交流を深めることができた。	研究所からの情報をHPはもちろん、学会のメーリングリストなどを活用し、迅速に発信するようつとめたとところ、多くの手応えがあった。今後も情報発信につとめたい。

自己評価について

- S 目標を十分達成し、質の向上が顕著である。
- A 目標をほぼ達成し、質の向上が見られる。
- B 目標の達成が不十分である。
- C 目標が達成できていない。

【重点目標】	【目標を達成するための施策等】
従来の研究テーマ「トランスナショナリズム」をさらに追求する。現代日本に特有な現象として「トランスナショナリズム」を考えるのではなく、歴史的な観点を加えて考究する。☒	専任所員を中心に「トランスナショナリズム」をテーマとした研究企画（シンポジウム、研究会）を行い、成果をまとめる。
【年度目標達成状況総括】	
専任所員を中心に「トランスナショナリズム」をテーマとした研究企画を行うことができた。「トランスナショナルな日本」研究会（6）『ベン・ブラッドリー自伝』刊行記念『ワシントン・ポスト』編集主幹のベン・ブラッドリーと日米ジャーナリズム考（2025年6月21日）、研究会（7）「日本のスポーツとトランスナショナリズム」（2025年10月4日）等、第8回日欧新4世代ワークショップ日本と西洋のトランスナショナルな関係（2025年11月28日29日30日）の他シンポジウムを2回開催し、ヨーゼフ・クライナー博士記念法政大学国際日本学賞授賞式と記念講演会を開催した。研究成果の一部は『国際日本学』誌上で明らかにしている。	